

アプローチ手法検討部会及び居場所検討部会における協議経過

※委員・幹事は敬称略

第 1 回	アプローチ手法検討部会	居場所検討部会
	<p>【日時・会場】令和6年2月 22 日 教育支援センターB</p> <p>【出席委員・幹事】(委員)平戸ルリ子、野田義博、星野由紀子、中道精司、山本依里子 (幹事)清水正隆、石野良恵</p>	<p>【日時・会場】令和6年2月 22 日 教育支援センターC</p> <p>【出席委員・幹事】(委員)児美川孝一郎、宮澤一則、中里真一、木村駿 (幹事)渡辺五樹、丸山博史、太田弘晃</p>
	<p>【部会長選出】平戸ルリ子委員を部会長に選出</p> <p>【議題】不登校の要因・原因・状態を鑑み、想定されるアプローチ手法検討について(意見交換) (「不登校の背景を的確に捉えるために」現在の状況把握と問題意識についての共有)</p> <p>【委員の意見】</p> <p><b>アプローチの成功事例</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校児が地域の清掃活動への参加をきっかけに地域と関わりはじめ、学校に行けるようになった</li> <li>・保護者が早朝出勤で登校時間に起きられない不登校児の支援を民生・児童委員に依頼し、毎朝迎えに行ってもらったことで、毎日時間通りに来るようになった</li> <li>・居場所の職員も、必要であれば子どもを迎えに行っている。施設内で他校の友達ができ、徐々に来られるようになる</li> <li>・学校との関わりに消極的だった不登校児の保護者へのアプローチを SC(スクールカウンセラー)が根気強く行ったことにより、保護者とのコミュニケーションもとれるようになり、徐々に児童が学校に来るようになった</li> </ul> <p><b>子どもへの関わり方の困難さ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他人に干渉されることを嫌がり、「来るんだったら絶対学校に行かない」と介入できないことがある</li> <li>・声掛け支援、登校支援中は学校に行けるが、その後自主的に行くことができない</li> <li>・「なんで学校に行かないのか」本人もわからない。「なんとなく」行きたくないケースが増えている</li> </ul> <p><b>肯定的な声掛けの重要性</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・久しぶりに居場所に来た子に「これまでなぜ来られなかったの」ではなく「今日はよく来たね」という声掛けをすることで、その子が施設に来る頻度が増えた</li> </ul> <p><b>関係機関同士における情報共有の重要性</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今年は SSW(スクールソーシャルワーカー)との情報共有を密にしたことで、不登校傾向ケースを早い段階で情報共有できるようになってきている</li> </ul> <p><b>第三の居場所に対応できる人員の不足</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教室以外の居場所(保健室等)に来る子に対応する人材の確保が課題。せっかく登校しても保健室にひとりでは楽しいわけもなく、結局はイベント時のみ登校するケースもある</li> </ul>	<p>【部会長選出】児美川孝一郎委員を部会長に選出</p> <p>【議題】不登校の要因・原因・状態を鑑み、有効な居場所・あるとよい機能について(意見交換) (「多面的な支援の実現に向けて」現在の状況把握と問題意識についての共有)</p> <p>【委員の意見】</p> <p><b>指導・評価のない居場所づくり</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「評価をされたくない」と思う子が多い。学校は機能的に難しい部分もあると思うが、居場所に関しては指導的な目線は取り払ったほうがよいのでは</li> </ul> <p><b>子どもの本音や意見を反映させた居場所づくり</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「もっとこうしたい」「こういうものがあったらよい」等、自分自身の意見を持っている子が多い。子どもの意見を尊重・反映させながら一緒に作り上げることが重要。</li> </ul> <p><b>学習機会の確保の重要性</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・居場所に来る子どもは「勉強したいけど、教室に行けない現状では取り組みづらい」という声を聞く。子どもたちの学ぶ権利を保障するところまでやりきらないといけない</li> </ul> <p><b>自由に利用できるオープンな居場所の活用</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生涯学習センターは、学校と連携して子どもを支援する際、最初こそ少人数の関わりだが、そのうち一緒に支援を受けている子ども同士でコミュニティができる貴重な居場所</li> </ul> <p><b>専門知識を持った人材がいる居場所</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校背景は様々で、対応できる人材が居場所にいることが本来必要。教育に携わっている、心理のことを知っている等、子どもの気持ちに寄り添えるスキルが必要</li> </ul> <p><b>一人ひとりの学習形態に沿った居場所づくり</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大人数の教室ではなく「一人で勉強したい」「画面を見ながら勉強したい」という多様性が出てきている。それに対応できる多様な環境が必要ではないか</li> </ul> <p><b>1 クラス児童生徒数の在り方</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校現場の視点からみると、少人数学級であるほど子ども一人ひとりへの目が行き届きやすい。コロナ禍で分散登校によりクラス生徒を半分にした際は目が届きやすかった</li> </ul> <p><b>自己肯定感・自己有用感を伸ばす接し方</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が認められる瞬間を作ることは大切。一例として、1回目の定期考査は簡単な問題で皆が 50 点以上とれるようにすると、そこで自信を持った子どもたちは次の定期考査がハードル高めでもそこに向かって努力していく。子どものチャンスを積極的に作ることは大切</li> </ul>

第2回	アプローチ手法検討部会	居場所検討部会
	<p>【日時・会場】令和 6 年7月 11 日 グリーンホール 502 会議室</p> <p>【出席委員・幹事】(委員)平戸ルリ子、星野由紀子、中道精司、山本依里子 (幹事)清水正隆、石野良恵</p>	<p>【日時・会場】令和6年7月 12 日 教育支援センターA</p> <p>【出席委員・幹事】(委員)児美川孝一郎、太田繁伸、久保正敏、木村駿 (幹事)吉田有、冨田和己、太田弘晃</p>
	<p>【議題】不登校の背景を的確に捉えた、多面的な支援の実現に向けて、「何が必要か」</p> <p>【委員の意見】</p> <p><b>支援機関同士の連携強化</b></p> <p>・保護者からの発信が少ない中で、時折あるSOSを逃さないことが大事。SSW や SC に少しでも繋がるきっかけがあれば連携して支援に繋げることは大事</p> <p><b>支援情報の周知強化</b></p> <p>・アンケート結果にもあるとおり、自宅や学校以外に過ごせる居場所が、多くの子どもに知られていない。様々な媒体(学校だより、校内ポスター、区広報等)で、相談窓口や支援機関の情報発信を強化すべき</p> <p>・相談力が備わっていない保護者に「相談してください」ではなく「こういうことができますよ」と具体的な支援情報をこちらから周知できることが重要</p> <p><b>多様な地域人材の積極的な活用</b></p> <p>・学校によっては教室以外の居場所に来る子どもを、民生・児童委員や大学ボランティアが、学校やSSW と連携・面倒みているところもある。多様な人が関わる体制は必要</p> <p><b>多様な将来設計への道筋創出</b></p> <p>・実は不登校の中学生も「高校には行きたい」子が多い。自分の学力や勉強の取組みとは別で、「スポーツが強い」「吹奏楽が強い」「先輩が行っている」等の理由。そのような様々な動機が将来に繋がればよい</p> <p><b>多様なニーズに応じた学習支援</b></p> <p>・学校の学習ペースではできない勉強も居場所では自分のペースで行える。しかも一人ではなく、先生が手伝ってくれるような場所は不登校児にとっては大変重要</p> <p><b>子どもの個性に応じた個別支援</b></p> <p>・アンケート結果でもあるが、朝起きられない子が不登校児には多い。その子も、自分が活動する時間帯に行ける居場所には行ける</p> <p><b>社会との接触意欲の応援</b></p> <p>・フレンドセンターやフリースクールへの出席も登校扱いとしている場合もある。必ずしも学校に登校せずとも、社会と繋がっている状況を積極的に後押しする応援体制は必要</p>	<p>【議題】不登校の背景を的確に捉えた、多面的な支援の実現に向けて、「何が必要か」</p> <p>【委員の意見】</p> <p><b>支援機関同士の連携強化</b></p> <p>・学校は集団規律をもつシステムであり、別室登校から教室へ戻ることが難しい子どももいる。規律が心地よい子もいれば、そうではない子もあり、特性に応じて学校・居場所・専門機関が連携していくことが必要</p> <p>・居場所が必要な生徒の情報共有の場が重要。複数の学校・関係機関同士での情報共有・連携は重要</p> <p><b>支援情報の周知強化</b></p> <p>・保護者からの発信が少なく、「無理に外に行かせる必要がない」「本人が嫌なら仕方ない」と思う保護者が多い。将来の展望を子どもたちや保護者が知ることができる手段が必要</p> <p><b>多様な地域人材の積極的な活用</b></p> <p>・地域の人材で、学習支援として無料の家庭教師をしてくれるなどがあってもいいのでは。子ども食堂もそうだが、子どもからしても、身近な地域の人達の支援は安心感があると思われる</p> <p><b>多様な将来設計への道筋創出</b></p> <p>・学習支援に関してはこれまでの「万遍なく勉強ができる」ではなく、「秀でたもの、やりたいものを一緒に探す、見つけてあげる」ことが必要</p> <p><b>多様なニーズに応じた学習支援</b></p> <p>・教室以外場で学べるオンライン授業はニーズを感じる。オンライン学習支援や課題提出でも成績が評価される仕組みがあるとよいのでは</p> <p><b>多様な人材やネットワークで最適な関係性の構築</b></p> <p>・最初から社会との接点を求めるのではなく、まずは個別支援、その後少人数で活動し、徐々にコミュニティーを広げられる中間的な居場所があることが大事</p> <p><b>社会参加の機会の機会提供(自己肯定感、自己有用感)</b></p> <p>・「社会的自立」の定義は難しい。まずは本人が社会に参加している、社会の一員として存在しているという感覚を育むことが必要。「社会参加」していると自己有用感を感じられる居場所が大事</p> <p><b>「第三の大人」による寄り添い支援</b></p> <p>・子どもにとって家族でもなく先生でもない多世代の第三者(第三の大人)の存在は大きい。気軽に友達のように話ができたり、進路相談ができたりするメリットがある</p>

第3回	アプローチ手法検討部会	居場所検討部会																	
	【日時・会場】令和 6 年9月9日 グリーンホール 502 会議室 【出席委員・幹事】(委員)平戸ルリ子、野田義博、星野由紀子、中道精司、山本依里子 (幹事)清水正隆、石野良恵	【日時・会場】令和6年9月4日 グリーンホール 101 会議室 【出席委員・幹事】(委員)児美川孝一郎、太田繁伸、荒繁勝、久保正敏、木村駿 (幹事)渡辺五樹、吉田有、太田弘晃																	
	【議題】提言内容の調整及び提言構成案の構成について 【委員の意見】 (1)アプローチ手法強化についての意見交換 ・地域資源の掘り起こしが重要。属人的な支援に頼ると、その人がいなくなった段階で支援が途切れる。連携できる資源として、様々な活動をしている地域の団体なども活用できるのではないかと  ・根気よくアプローチを続けることが大事。子どもや保護者からのサインがなくてもこちらから積極的に絶え間ないアウトリーチをかけ続ければ、表に出てくることもある ・個別の状況把握が一番大事。家庭状況や背景を正しく把握することで、その後の効果的なアプローチに繋ぐことができる  (2)提言構成案についての意見交換	【議題】提言内容の調整及び提言構成案の構成について 【委員の意見】 (1)提言構成案についての意見交換																	
	<table><tr><th colspan="3">不登校の背景を的確に捉えた多面的な支援の実現に向けて 今後の対策に反映すべき「3つの視点」</th></tr><tr><th>繋ぐ</th><th>学ぶ</th><th>支える</th></tr><tr><td>▽支援機関同士の連携強化 ▽支援情報の周知強化 ▽多様な人材やネットワークで最適な関係性の構築 ▽社会参加の機会の機会提供 (自己肯定感、自己有用感) ▽多世代間交流の機会</td><td>▽多様な将来設計への道筋創出 ▽多様なニーズに応じた学習支援</td><td>▽多様な地域人材の積極的な活用 ▽子どもの個性に応じた個別支援 ▽社会との接触意欲の応援 ▽「第三の大人」による寄り添い支援</td></tr></table> <p>・大きな視点としてはこの3つの視点でよい。それぞれに共通する分野があればその下に項目立てするイメージでよいのではないかと。例えばいずれの視点にも「情報収集」は必要であり、その点が盛り込むべきではないかと</p> <p>・3つの視点は分かりやすい反面、「繋ぐ」「支える」は支援者目線で「学ぶ」は子ども目線。「学ぶ」を支援者目線で見ると「学びを提供する」というニュアンスなのでは</p> <p>・不登校の背景にあるものとして、子どもたちを取り巻く社会情勢の変化等を考慮するとすれば、不登校状態になる以前の「予防」という観点も必要では</p> <p>・状態を指す表現にするのもいいのでは。「繋ぐ」のニュアンスとして「繋がる」、「支える」だと「支えあう」とか。作用させる言葉だと、強制力を感じるかもしれない</p> <p>・板橋区として抱えている不登校問題の傾向や特徴を踏まえた提言にしていけたらいいのでは</p>	不登校の背景を的確に捉えた多面的な支援の実現に向けて 今後の対策に反映すべき「3つの視点」			繋ぐ	学ぶ	支える	▽支援機関同士の連携強化 ▽支援情報の周知強化 ▽多様な人材やネットワークで最適な関係性の構築 ▽社会参加の機会の機会提供 (自己肯定感、自己有用感) ▽多世代間交流の機会	▽多様な将来設計への道筋創出 ▽多様なニーズに応じた学習支援	▽多様な地域人材の積極的な活用 ▽子どもの個性に応じた個別支援 ▽社会との接触意欲の応援 ▽「第三の大人」による寄り添い支援	<table><tr><th colspan="3">不登校の背景を的確に捉えた多面的な支援の実現に向けて 今後の対策に反映すべき「3つの視点」</th></tr><tr><th>繋ぐ</th><th>学ぶ</th><th>支える</th></tr><tr><td>▽支援機関同士の連携強化 ▽支援情報の周知強化 ▽多様な人材やネットワークで最適な関係性の構築 ▽社会参加の機会の機会提供 (自己肯定感、自己有用感) ▽多世代間交流の機会</td><td>▽多様な将来設計への道筋創出 ▽多様なニーズに応じた学習支援</td><td>▽多様な地域人材の積極的な活用 ▽子どもの個性に応じた個別支援 ▽社会との接触意欲の応援 ▽「第三の大人」による寄り添い支援</td></tr></table> <p>・3つの視点は学校以外の部分が中心になっている。学校がどういう居場所になっていくかの視点も必要ではないかと</p> <p>・「支える」視点で、子どもだけではなく、家庭支援も重要ではないかと</p> <p>・「予防」の視点がないように思える。不登校になる以前に予防的に見つける視点は大事</p> <p>・「繋ぐ」「支える」は支援者側視点で、「学ぶ」は子ども視点。また、「繋ぐ」と「支える」も重なっている部分がある。「支える」は「子どもを直接的に支援する」という点と、「スタッフを支援する」という二層で考えたほうがよいのでは</p> <p>・いずれの視点も、「子どもへの支援の在り方」と「支援者への支援の在り方」で分けて設定するのもよいのでは</p> <p>・不登校支援の枠組みを考える時に「常に子どもの意見を聞く」「点検する」ということも含めるとよい。その点では「変える」視点も重要ではないかと</p> <p>・子どもに対しては「繋がる」「学ぶ」、大人に対しては「支える」という視点。また「支える」には「変える」点も予防的なアプローチとして入れるとすっきりするのでは</p> <p>・大人への支援を考えるうえでは「変える」視点が含まれているので、あえて新たな視点として「変える」というキーワードを使う必要はないのでは</p> <p>・「繋ぐ」言葉自体が強めな感じがする。広めに捉えられるような表現がよい</p> <p>・提言の構成として、子どもに対しての提言、支援者に対しての提言がそれぞれあったうえで、それぞれの下に3つずつ視点があるように階層を設けてもいい</p>	不登校の背景を的確に捉えた多面的な支援の実現に向けて 今後の対策に反映すべき「3つの視点」			繋ぐ	学ぶ	支える	▽支援機関同士の連携強化 ▽支援情報の周知強化 ▽多様な人材やネットワークで最適な関係性の構築 ▽社会参加の機会の機会提供 (自己肯定感、自己有用感) ▽多世代間交流の機会	▽多様な将来設計への道筋創出 ▽多様なニーズに応じた学習支援
不登校の背景を的確に捉えた多面的な支援の実現に向けて 今後の対策に反映すべき「3つの視点」																			
繋ぐ	学ぶ	支える																	
▽支援機関同士の連携強化 ▽支援情報の周知強化 ▽多様な人材やネットワークで最適な関係性の構築 ▽社会参加の機会の機会提供 (自己肯定感、自己有用感) ▽多世代間交流の機会	▽多様な将来設計への道筋創出 ▽多様なニーズに応じた学習支援	▽多様な地域人材の積極的な活用 ▽子どもの個性に応じた個別支援 ▽社会との接触意欲の応援 ▽「第三の大人」による寄り添い支援																	
不登校の背景を的確に捉えた多面的な支援の実現に向けて 今後の対策に反映すべき「3つの視点」																			
繋ぐ	学ぶ	支える																	
▽支援機関同士の連携強化 ▽支援情報の周知強化 ▽多様な人材やネットワークで最適な関係性の構築 ▽社会参加の機会の機会提供 (自己肯定感、自己有用感) ▽多世代間交流の機会	▽多様な将来設計への道筋創出 ▽多様なニーズに応じた学習支援	▽多様な地域人材の積極的な活用 ▽子どもの個性に応じた個別支援 ▽社会との接触意欲の応援 ▽「第三の大人」による寄り添い支援																	